
これからも、ずっと

たぬきち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これからも、ずっと

【コード】

N1000BA

【作者名】

たぬきち

【あらすじ】

圭祐、莉々兄妹と幼なじみの知也。家族同然に育った3人の年末のお話。

(前書き)

年末年始の時節物です。ついカツとなつて書きました。

忙しくて時間的に余裕あんまないんですが、さすがに時節物は後から出すのもどうかと思ひまして……。

短編なので短めです。異世界への3話弱分くらい？

異世界の方も時間が出来次第どうにかしたいです。

短編のあらすじってどうやって書くものなんだろうか。

年末年始なんてものは、どっかの偉い人が勝手に決めた基準でしかない。

例えば日本では、春になれば桜が咲く。奴らは毎年毎年飽きもせずその花を堂々と咲かせ、俺たち日本人に「ああ、今年も春が来たな」なんて思わせる。もちろん桜が日本だけって言うてるわけじゃないが、まあだいたいそんなもんだろ。春に桜、夏に海、秋に紅葉、冬には雪なんてのがいわゆる日本の風物詩とか言われるものだと思う。

ただ年末、年始となると話は別だ。

どこから年末でどこから年始、なんてのは昔の偉い人が勝手に決めたことだし、その基準なんて曖昧なもんだ。旧正月なんて毎年毎日付が変わるものだったらしいし、西暦が1年進んで日付が1月31日から1月1日に変わるだけで、例えば11月30日と12月1日なんてのと大差ないと俺は思う。

いやまあ、この際そんなことはどうでもいい。つまりこんな誰に聞いても解決しないようなことをだらだら考えているのが何故かと言えば

「さみい……」

「そんなの当たり前でしょ」

本日12月31日、夜11時。当然気温は下がっている。帰りたい。

「お前……よく寒くないな……。馬鹿だろ」

「馬鹿って何よ？ そりゃ寒いけど、女の子は我慢してるの。慣れ

てるしね」

「ジョシコーサーってやつか、そりやすげえな。俺には無理だから帰るわ」

「帰らせるわけないでしょ……」

隣でわーきゃー騒いでいる幼なじみ妹の方は、上こそもこした服装だが、なんと愚かなことに下はスカートだ。ミニスカ+ロングブーツに黒スト的な感じで、俺からしたら全くもって意味のわからない格好だ。周りをよくよく見てみると、そんなわけわからんジョシコーサー（だけではもちろんないだろうが）の姿がちらほら。まだ着物の方がましなんじゃなかるうかとよく見かける格好の人たちも見てみるが、どっちも大体似たような表情だった。ジョシコーサーすげえな。

「ところで圭祐はどこ行ったんだ」

「さあ？」

「さあ？ じゃねーよ。人多いんだからはぐれねーように手くらないどいてやれ。保護者だろ」

「私、妹……」

そんなもん知るかお前の方が大人びてるだろと言ってやると、「そりやそうなんだけど」と返ってきた。憐れ圭祐。お前はもう妹にもそんな扱いだ。

さみいさみい言いながら（そしてうるさい黙れと言われながら）、人ごみの中を適当にうろつき兄の方を探していく。本当ならじっとしている方がいいのかもしれないが、そんなもんは知らん。まだ動いてた方が温かい（多分）ってものだ。つーが目立つところだと人が少なすぎて壁が無いだろ？ 寒いんだよ。

「知兄……、本当に探そうとしてるの？ 病院行こうか？」

「どつちにしろ見つかるかどうかからのだ。なら俺は寒さをどうにかしたい」

「ケータイで連絡とってさっさと合流しようよ」

「莉々は馬鹿だなあ！ この人ごみじゃケータイなんて使えないだろ」

「だからあ……。いやもういいからこつち来て」

莉々に無理矢理引つ張られ、ぎゅうぎゅうと変な声を出しながら（当然変な目で見られながら）人ごみを抜ける。「私まで変な目で見られた……。最悪……。」と呟く莉々は顔に縦線入ってるんじゃないのかと思えるほど鬱な表情をしていたから「病院行こうか？ いやむしろ帰ろうか？」と声をかけてやったところ、見事にスルーしやがった。なんて酷い奴だ。俺が何をした。

「あー……。もう！ なんで電話取らないの！」

「あいつ馬鹿だからケータイとか置いて来たんじゃないか」

「あり得そうで怖い」

すぐに電話をかけ始めた莉々がイライラとしだすのにその時間はおかしくなかった。圭祐は現代っ子の自覚がないのかケータイをよく置いていく。曰く、「だって急に音が鳴ったら迷惑じゃん。アホか」だそう。お前がアホか、そんなときはサイレントにでもしとけ。

「圭祐出ないんじゃないじゃ結局意味ねーじゃん。ちょっと莉々さん、なんで俺たち人ごみから出たの？ 寒いんですけど」

「圭兄はケータイを持ってないという可能性を忘れてたの！ 悪かったわね！」

「何だその態度は。ほら、お兄さん怒らないからちゃんとごめんなさいしてごらん」

「……ごめんなさい」

「じらー！」
「……………はあ」

盛大にため息をつく莉々。せつかく俺が気持ちだけ温まるうと思つたのに、乗ってくれないんじゃないか。とりあえず何か温かいもんでも探すかな。深夜にも関わらず人が多く来ているからか、そこらじゅうに屋台がある。祭か、と思つたがこの際温まれるならなんでもかまわん。むしろ感謝してやろう。

「ん？ 知也、莉々、どこ行つてたんだ。心配したんだぞ！」

屋台の方を適当に眺めていると、どこからかアホそうな声が聞こえてきた。どこ行つてたんだじゃねーよお前がどこ行つてたんだよ迷子はお前だよと言ってやりたい気持ちだったが、あまりのアホらしさに思わずため息をつく。隣で肩を落としている様子の莉々と「何も聞かなかつたことにしよう」とアイコンタクトをかわし（いや実際何考えてるかさっぱりだが、多分こんな感じだ）、2人で逆方向を指して歩き出す。俺たちは圭祐を探そうとしていたんじゃないのかつただろうか。馬鹿なんだろうか。

「おい、ちよっ！ 聞こえてねーの？ ほら、適当に食い物買つて来たからさ！ 寒いだろ？」

「おうおう、そういうことは先に言え。さつさとよこしな、兄ちゃん」

「裏切り者……………っ！」

「全くお前らはいつまで経つても迷子になるよな」とドヤ顔を決めてくる圭祐を当然のように無視し、手に持っているビニール袋をひったくる。「圭兄が迷子なんだよ……………？ 病院行こうか？」と頑張って兄を諭す妹。頑張ってくれ、俺たちの平和はお前にかかつて

いる。焼きそば、たこ焼き、焼き鳥、りんご飴……はいらんから莉々にくれてやるう。きつと泣いて喜ぶはずだ。

「おい圭祐、おでんが無いじゃねーか。馬鹿か？ 買っとけよ」

「いや汁物とか危ないし」

「なんでお前、そういうとこだけ常識人なんだよ！ 馬鹿か！」

「知兄意味分かんない」

「うっさいお前はこれ食っとけ」

「ん……」

呆れた表情だった莉々はりんご飴をくれてやると少し嬉しそうに食べ始めた。好きなもん食えてよかったな。ただ圭祐でめえ……おでんが無いとかセンス無さすぎだろ。どんだけ苦労してでもおでんは買ってくるべきだった。おでん最高おでんプリーズ。あれか？ 妹には好きなもん買ってやるけど弟には買わねーってか？ まあ弟じゃないけど。

「それよりさ、おみくじ、買って来たんだ。3人分！」

「馬鹿かお前は」

「ん………馬鹿。んっ………」

「食ってからにしろ」

「んっ………わかった」

さっきまでぎゃあぎゃあ騒いでいた姿はどこへ行ったのか、莉々は一心不乱にりんご飴をなめる。音を立てて舐めまわすもんだからちゃんとやれば（ちゃんとつてのが何かは知らんが）エロく見えるのだろうが、むしろガキっぽい感じが強調されているような気がする。おい、そのこの男。ロリはやめとけ、隣の女にドン引きされてんぞ。莉々は平均的高1程度の成長度だとは思うが、この姿を見る限りやっぱり俺たち3人の中では一番下なんだろうなと思った。

「馬鹿つて……。3人で行くとな人が多くて買いにくいかと思ってわざわざ買って来たのに」

「いやお前さ……。人が引いて来たおみくじに何の意味があんの？」

「別に中身同じじゃないつて」

「そういう意味じゃねーよ」

「まあもう買って来ちゃったから。ほら、これ知也の分な。で、これが莉々の分」

「……もういいよ」

嬉々とした表情で圭祐がおみくじを配る。こいつほんとに俺らより年上なんだろうな……。？ 一番お子様だろ。莉々が一番下って考えは改めた方がいいだろうか。「じゃあ開くぞ？ セーの！」なんて掛け声が聞こえたが俺と莉々は当然のごとくスルーした。莉々に至ってはりんご飴しか見てない。

「大吉だー！！ ほら、見るよお前ら！ これなら受験も余裕だあー！！」

「……………食べる？」

「ん？ ああ、さんきゅ」

「かじってもいいよ。はい」

りんご飴しか見てない莉々しか見てない俺に莉々が気付いて（なんか変な表現だな）、りんご飴をすつと差し出してくる。赤くてかてか光っているそれは、莉々の唾液で更にてかてかしていたが、幼い頃から兄妹同然に育った俺たちはそんなこと気にするほどのことでもないのだ。りんごを少し食べれる程度にかじって返す。甘い。

「おい2人とも聞こうよ！ とうか莉々、俺にもちょうだい！」「やだ」

「というか俺が買って来たんだけど。なんで断られたの!？」

「迫り方が変態っぽいからだろ」

「失礼な!」

器用にも流れるような動作で胸のポケットにおみくじを押しこみ、両腕を使ってポーズを取りながら迫る圭祐は明らかに変態の動きだった。むしろぺらぺらした紙をそんな簡単に胸ポケットに入れられる時点で変態だった。普通そんな簡単に入るもんじゃ……ないよな? いや服にもよるんだろうけど。

「つか…… お好み焼き冷めてんじゃん。最悪……」

「そりゃそうだ。買ったの結構前だし」

「ちっ…… 使えない奴め……」

「それよりおみくじ、見ようよ」

もう冷めてしまったお好み焼きたちには半分の価値しかないな、なんて考えつつも手に握らさせられたおみくじを1度見て、圭祐の顔を見る。この顔はあれだ、「俺は大吉だったけどお前どう? 勝てないだろ!」って考えてる顔だ、うぜえ。いやわからんが。仕方ないから俺はアホみたいな面をした圭祐に言っただけ。

「喜んでる暇あったら勉強しろ」

「それは…… 言うてはならないことなのだ……!」

「知るか。お前もう受験近いだろ、こんなところでだらしていいのよ」

「たまには息抜きしたっていいじゃない」

「それ2日前も聞いたぞ。なんで2年の俺が受験控えてる3年に引っ張り回されなきゃならんのだ」

「母さんみたいなこと言いやがる……。はっ、まさかお前は……母さん!？」

誰がお前の母親か。意味わからんわ。……は！？ このまま勉強しろと言いつづければどうにか帰る方向に持っていけるんではなからうか？ 俺、天才。

「よし、圭祐。帰っ」

「ダメだから。ていうかもうすぐ日付跨ぐし」

「て……そうですかはい。すみませんでした」
「わかればよろしい」

喋ってる途中で莉々が容赦なく睨みつけてきた。思わず退いてしまった。完全に失敗した。いつの間にもりんご飴食ったんだろうか。そんなに変態がキモかったんだろうか。いくらなんでも早すぎだろとりんご飴に関する疑問は尽きないが、大人しくすることにした。そんな莉々様は「未吉……微妙」と唸っている。そういえば未吉って吉とどっちがいいんだろうか。個人的には大凶>大吉>中吉>吉>未吉>凶じゃないかと思ってるんだが。大凶が一番上なのはもちろんレア度的な意味で。あれマジで入ってるのかな。

「知兄は？ まだ見てないんですよ」

「……こんなの見たって意味ねえよ」

「なんだお前、適当なことしか書いてないから意味ないか思ってるの？」

「いや……別にそういうんじゃないけど」

「なら見ればいいじゃん。当たるも八卦、当たらぬも八卦って言うし。ね？」

圭祐と莉々が交互に進めてくる。こいつらなんでそんな推してくるんだ？ と思ったものの、よくよく考えてみればここで敢えて拒絶する俺がおかしいだけで、普通はさっさと開けるもんだからかと思

いなおす。だがしかし、ここで折れたら負けだ。だから俺はそれっぽいことを2人に言ってる。

「この結果が良ければ前向きにそうしようとするし、悪ければそうならないように努力する。だからどっちだって変わんねえよ。見たって意味ない」

ちょっと斜に構えた感じで言ってるなら、2人ともアホ面してぼかーんだ。やべえ……これは……。

「……………」

「……………」

「じ……実家に帰らせてくださいお願いします」

「何恥ずいセリフ言ってるの？ 似合わないよ」

「決まった！ とか思ったんだろけど、正直寒いぞ？」

「ていうか去年はそんなこと言ってなかったよね。今年はなんぞそんなこと言うの？」

「いや、言ってる妹よ。臭いセリフを吐いてみたくなる年頃ってのがあるんだよ」

「もう……許してください」

結局、おみくじの結果は見ないことにした。2人も俺の気持ち尊重（笑）してくれたんだろう。心が……痛いです……。

そんなとき、近くの寺からだろう、除夜の鐘がごとんとタイミンが良く鳴ったのだった。まあさつきから結構鳴ってたんだが、このタイミングで鳴らされるといわゆる大喜利とかの「カーン！」って奴に聞こえてならない。マジ悲しい。

「そつえば、2人は除夜の鐘が12月31日に何回鳴るか知ってる？」

「は？ 108回だろ、普通に考えて」
「いや、違うね」

莉々の質問に俺が答えると、圭祐が食ってかかってきた。なんだこいつ、馬鹿だなあみたいな顔しやがって。むかつく。

「じゃあ何回だよ」

「たくさん！」

「はいはい凄いねー」

「もう……圭兄は黙ってて」

「いや、だって全国で鳴ってんだぜ？ 数えきれないだろ」

「はいはい凄いねー」

「そういうの聞いているんじゃないの。いいから黙ってて」

「はい……」

俺は適当に流していたが、莉々も結構酷いやつだ。まあ普通に考えればそんな答えを求めてるわけがないと気付くが、圭祐だから仕方ない。

「正解はね……107回なんだよ」

「108回じゃなくてか？」

「うん。31日に107回突いて、最後の1回は1日に突くの。豆知識」

「なるほどな。だからわざわざ12月31日って言ったのか」

「あ、わかった？」

「年内とかじゃ結局108回だもんな」

うまく言い回しが思いつかなかったんだろう。会話としては少し不自然に感じたが、そこまで気にすることでもないかとスルーしたのだ。決して、わからなかったから会話を思い出してそれっぽいこ

とを言ってるわけではないのだ。横では圭祐は「やっぱりたくさんが一番合ってると思うんだけど……」とかアホなこと呟いているが、今の問題の答えとして納得するのはお前くらいだ。なんて風にくだらないことを喋っていたのだが、どうやら年越しの時間がやってきたようだ。やれやれ、これでやっと寒さから解放されるな。

「2人とも、そろそろ時間だよ。準備はいい？」

「準備って……何の」

「わかってる。ほら、知也、手出して」

「やだよ寒い」

「いいから出して！」

莉々が急かすように俺の手をポケットから出……せない。俺、頑張る。「ちよつと！ くだらないことやっつてないで出してよ！」とかほざいてるが、寒いものは寒いのだ。わざわざ手を出して手まで寒くなったら困る。むしろ今ですら寒い。と思っていたのだが、莉々の方にはっかり気を取られていたがために圭祐に手を取られてしまった。「ほら、俺が温めてやるから……さ？」とかキモいわやめる。と蹴り飛ばしてやった。

「知兄……」

「……わかった、わかったから。ほら、これでいいだろ」

「うん、ありがとう」

手を出して握ってやると嬉しそうな表情をする莉々。「全く知也はツンデレなんだから」と言ってるアホがいたので「ツンデレじゃねーよ。超クールだろなめんな」と手を握ってやった。全く……子守は疲れるな。世の中のお母さんたちすげえや。

『10! 9! 8! 7! 6! 5!』

アホみたいなおことをやっていたら、時間はギリギリになってしまっていたらしい。周りからカウントダウンを始める声が聞こえた。慌てて兄妹が手をつなぐ。

『4!』

こんな夜中に近所迷惑なんじゃなかろうかともどうでもいいことを考えていると、圭祐と莉々が視線を合わせてくる。

『3!』

なんだてめえらガン飛ばしてんじゃねーぞと言ってやりたかったが、こいつらの言いたいことくらいわかってるつもりだ。

『2!』

ほんの一瞬、こいつらのことを裏切っても面白いんじゃないかと考えた。

『1!』

別にする必要もないな、と考え直し『せーのっ』と声を合わせ、膝を曲げる。

『ハッピーニューイヤー!!』

両腕を天に掲げ、空中にジャンプした俺たち3人は、再び地に足を付ける。周りでも似たようなこと考えたやつがいたのか、もみくちゃになってるところもある。なんてざまだ。迷惑なのわかってん

だろ考えろよと自分たちのことを柵に上げながら考えた。

「とりあえず、参拝しに行こうか」

「うん」

「ああ……」

兄妹は満足したのか、さっと手を離し流れに沿って歩き始めた。お前ら勝手に進むんじゃないよまた圭祐が迷子にاندると言つてやりたかったが、まあ動くスペースもそこまで多くないしちゃんと見張つてれば大丈夫かと思いなおして口にはしなかった。

「ねえ……2人はもう願回事考えた？」

「俺はとりあえず合格かな」

「俺は……まあ、秘密」

「なんでよ？ 別にいいじゃん。あ、知兄つてあれ？ 他人に言わない方が叶うような気がするってやつ？ 普通に考えて言った方が叶うでしょ」

「いやそついうんじゃないよ」

「まあまあ莉々。知也は照れ……ツンデレだから」

「おい圭祐。なんで言いなおした。どつちも違つからな？」

俺が照れ屋？ ツンデレ？ はっ！ やめてくれ笑わせんじゃないよ。どこからどう見たらそうなるんだ。目ん玉くりぬいて一回洗つてからはめ直しとけ、なんて考えつつ呆れかえっている、莉々が「……まあいいけど」なんて言いやがった。お前な……俺はツンデレじゃねーからな？ ちゃんとわかっている？

「私は、『3人でずつと一緒にいられますように』っていうのが願
い、かな」

「……っ！」

どきりとした。こうやって新年を迎えるのは初めてじゃないし、朝に初詣に行った年だってあったが、こいつはいつもそんなこと考えてなかったはずだ。お年玉たくさんもらえますように、とか、おせち食べても太りませんように、とかそんなことを願っていたと思う。

「はは、無理だろ。そんなの。全く莉々は子どもだな」

「そんなのわかんないじゃん。例えば圭兄が受験失敗してさ、こっちに居て」

「お前……身内の不幸願うなよ……」

「例えばの話だよ」

そう、圭祐は今年受験だ。こいつは頭弱い割に勉強は出来るから、東京の大学に行く、と言って聞かなかった。もちろん滑り止めとかそういうところは地元の大学を受けてるようだが、本命の大学に受かったら嬉々として東京へ向かうだろう。俺や莉々を、こっちに残して。

「別に私も、本気で落ちてほしいなんて思ってるわけないじゃん。なんて言うの？ 心の中で、みたいな話だよ」

「心の中、ね……。恥ずかしいこと言いやがって」

「いいじゃん別に！」

圭祐が莉々を茶化す。いつも能天気な圭祐も、ようやく気付いたんだろうか。学年も違うのに幼い頃からずっと一緒にいた俺たちが、もしかしたら今年、離れることになるかもしれない。別に今更友情がどうのとか、距離感がどうのとか、そういうことじゃなくて。長期間離れて暮らす、ということが初めてだと。当たり前のように隣にいた存在が、数カ月後にはいないかもしれない。

「ほら！ 順番来たよ？ やり方わかってる？ 2礼、2拍、1礼、だからね？ お賽銭、投げちゃダメだからね！」

「わかった、わかったから。莉々、後が聞えてるから」

「知兄も、わかった？」

「あ、ああ……」

少し恥ずかしげな様子の莉々は、ごまかすように早口に喋る。すぐに前に向き、音を立てないように5円玉を落とすと、2礼2拍し「3人一緒にいられますように」と口にした。ずっとという願いは取り下げたらしい。

「ほら、圭兄と知兄も早く」

「わかってるよ」

1礼して振り返った莉々は、俺と圭祐に場所を譲る。圭祐も同じように「受験合格受験合格受験合格」と3度口にし、「流れ星じゃないから」と莉々に突っ込まれていた。そして俺もお賽銭である5円玉を軽く落とし、2礼2拍手。

これからも3人で一緒に過ごせますように。

1礼し、その場を退く。「で、何願ったの？」と莉々に聞かれたが、「秘密」とだけ答えて言葉を濁した。そう、奇しくも莉々の願いと一緒だった。正直な話、恥ずかしくて言えたもんじゃねえ。こればかりは墓まで持って行かねばなるまい。なら変えるよって話なんだが、そもそも願いはこれしか決めてなかったし、別に被ったから変えなきゃならない、なんてことはないはずだと思っただ。

「ほら、知也はツンデレだから」

「……まあ、いいけど……」

うっさい。ツンデレちゃうわ。

「じゃあとりあえず、おみくじ結びに行こっか。なんか納得いかないけど」

「納得いかないってなんだよ！　せっかく引いてきてやったのに」「それが納得いかないの」

呆れた様子の莉々と、何故か憤慨している様子の圭祐。ごめん、お前が憤慨する意味がわからん。「結局知兄はおみくじは見ないの？」と声をかけてくる莉々に対し、「ああ」とだけ答えてポケットに押し込んでいたおみくじを取りだす。

「せっかくだし、一緒のところ結ぼうよ」

「そうだな。おみくじだけでも3人一緒にしてやるか」

「いや……圭祐が受かるとは決まってるないけどな？」

「そりゃそうだけだよ！　そういうこと言っのやめようぜ……」

莉々の提案に反対する理由などなく。せっかく俺も同じこと願ってただし、これくらいやってやらないと思う。中身は見えてないけど。

「ほら圭兄、さっさと結んで」

「お前ら俺に冷たいのな……。よし、この大吉くんは俺の願いを託して……！」

「じゃあ私はその上から末吉で上書きする感じで」

「ちよつと！　お前わざとだろ！」

「なら俺の結果不明のおみくじで上書きする感じで。圭祐、運くらい自分で引き寄せてみせろよ」

「うわー……。知兄、大丈夫？ 病院行こうか？」

「なんかお前……。今日、変じゃね？」

「うっさいな！ せっかく乗ってやったのにそりゃねーよ！！」

全くこいつらときたら……。くすくすと笑う兄妹を睨みつけ、大きく息を吐く。「ため息は幸せが逃げるんだよ」と莉々が言ってくるが、お前もさっきため息ついてた。不幸せさんめ。

「……それよりさみい。さっさと帰ろう」

「それじゃあ、次、行こうか！」

「そうだな」

「……は？」

帰る気満々だった俺は、何故かやる気満々の兄妹に置いていかれる。ちょっと待てよお前ら歩くの早すぎ。まず寒くてそんなスピード出ないんですけど。っーか人ごみの中すいすい歩いていけるお前から気持ちわりーよ。

「ほら、次は海行くんだから」

「初日の出、見ようぜ！」

「……ぜってーさみいじゃん」

「いいから！ 行くよ！」

「また手……。握ってやるうか？」

「きしよいわ、やめる。わかった、行くからとりあえずおでん探そうぜ。っーかさすがにまだはえーよ」

早く早くと急かす2人をなだめ、屋台を探す。ほんと海とかもう、寒くて寒くて仕方ない場所なんか行きたくないが、こいつらなら仕方ない。付き合っただろう。

こんな日々が、ずっと続けばいいのに。そう願っただから。

了

(後書き)

誤字脱字・感想などなどありましたら気軽にお伝えください。

私は日付の変わる時間とかそういうところで神社に行ったことはいないので、いやこついうものじゃないと思ってても生温かい気持ちでスルーしてあげてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1000ba/>

これからも、ずっと

2012年1月2日09時47分発行